

失敗を糧に

夏と言えば「甲子園」という言葉があるくらい、高校野球の夏は私達に少なからず感動を与えます。本年は埼玉県勢初の優勝を花咲徳栄高校が得ました。予選の段階で早稲田実業高校の清宮選手のフィーバーがありましたが、1998(平成10)年の甲子園は横浜高校の松坂投手を擁し春・夏優勝しました。このとき、松坂フィーバーと称されました。この他に2010年に優勝した早稲田実業高校のハンカチ王子こと斉藤フィーバーなどがあります。

いまから60年前の1957(昭和32)年の春に甲子園を湧かしたのが早稲田実業高校の王貞治選手(後に巨人軍で活躍、巨人軍や福岡ソフトバンクホークスで監督、全日本監督を務めた)でした。春の選抜高校野球大会において3試合連続完封で決勝まで駒を進め、決勝戦では手にできた肉刺が潰れ血染めの投球でチームを見事優勝に導きました。翌1958(昭和33)年、春の選抜高校野球大会では敗れましたが当時の木製バットで2試合連続ホームランを打つ活躍をしました。残念ながら3年最後、夏の全国高校野球選手権東京大会では決勝で明治高校に4対5で敗れ、甲子園に行くことができませんでした。同じ決勝で敗れるところは、今年の清宮選手も同じで何かの縁ですかね。しかし早稲田実業高校のエースで4番打者、超高校級の逸材で現在の清宮選手と同様の実力・人気を兼ね備えた選手でした。

プロ野球界は王選手を入団させるため争奪戦となりました。当時サラリーマンの平均給与が3万5千円前後のとき、王選手が巨人軍と契約した金額は1800万円、年俸144万円(月給にすると12万円)といわれています。そんな王選手でしたが、王選手の人生は成功ばかりの人生ではなく、失敗を糧にして歩んできた人生だといわれています。

王選手が高校を受験するとき、早稲田実業高校に進学しようとしていたわけではありません。当初は東京都立墨田川高校に進学しようと考えていました。王選手の父親は現在の中華民国籍でしたが、中国国共内戦前は中国本土の浙江省に生まれ育ちました。そのため、中国本土に戻って、子どもたちを医師、技師として祖国のために働けるように進学させようとしていました。王選手の兄は慶応大学医学部に進学し医師になっています。王選手は技師になるため理工系大学を進学しようとしていました。そのため、王選手は自宅に近い都立墨田川高校(旧制府立第七中学校)を受験しますが、不合格になります。そこで中学生時代に河川敷のグラウンドで声をかけてくれた早稲田実業高校のOB荒川氏(後の巨人軍打撃コーチで王選手の師匠)の縁で早稲田実業高校に進学することになります。ここで受験に失敗することが、人生の大きな岐路を意味します。実は墨田川高校は校地が非常に狭く野球部がありませんでした。もし墨田川高校に進学していたら「世界のホームラン王」は存在していなかったことになります。

3試合連続完封で甲子園優勝投手という勲章を胸に、巨人軍に投手として入団しましたが、春のキャンプで直ちに投手クビを言い渡され、一塁手に専念することになります。やはりここ

でも投手として失敗することが、打者として後に成功する岐路となりました。当時の首脳陣に言わせるとコントロールはよいがボールに凄みや切れがなかったそうです。しかし、打撃練習では凄い打球を放ち、当時のレギュラーで3番を打っていた一塁手が王選手の打撃練習を見て、自ら外野にコンバートを志願したという逸話が残っています。

巨人軍に大きく期待され1年目からレギュラーになりましたが、「世界の一本足打法」と称されるまでは普通に打っていました。しかし当時は「三振王」というスタンドから不名誉な声がかけていました。二本足でタイミングが上手く取れず、そこで右足を上げる打ち方で打ってみたら、試合でホームランを含む長打を連発し、そのまま右足を上げる打ち方になったのです。その後、ホームランの世界記録を樹立し、国民栄誉賞を受賞するまでに至ったのです。

王選手だけではありません。「失敗は成功の母」といったのはアメリカの発明王トーマス・エディソンですが、成功した偉人たちは失敗を、次の成功にするための教訓としています。なぜ、失敗したのか。どうすれば失敗を回避できるのか。新しい道(ステップ)で失敗をどのように生かすのかを考え、決断し行動することが成功につながるのだと思います。人生で失敗は成功の数ほどあると思ってください。失敗を恐れて挑戦しないことが、一番の失敗です。何はとにかくやってみましょう！

青山学院女子短期大学の募集停止の意味するもの

7月25日、学校法人青山学院、青山学院女子短期大学より学生募集停止の発表がなされました。その前年2016年7月やはり立教女学院短期大学が学生募集の発表を行っています。立教女学院短期大学は2018年度入試から、青山学院女子短期大学は2019年度入試から募集を停止します。定員割れしている地方大学・短大や法科大学院では近年いくつもの学校が募集停止や、閉校になっています。決して珍しいニュースではないのですが、この両短期大学は都心の一等地にあり、伝統もあり、定員割れすることもなく、20年前には4年制大学同様に難関大学・短大に数えられていました。大学に合格できても青山学院女子短期大学、立教女学院短期大学、上智短期大学、県立外語短期大学には合格できないというケースは珍しくありませんでした。やはり15年ほど前に2大有名ビジネス系専門学校が閉校になったのも、学校関係者にはショッキングなニュースでした。

今回の青山学院女子短期大学の場合、1990年度入試の志願者8535人がピークで、2017年度入試では1930人まで減少したそうです。しかし定員割れは一度も起していないそうです。短大でこれだけの受験生を集めている短大は全国でもないと思います。その青山学院女子短期大学が募集停止になるのは、学校関係者だけでなく社会にも与える影響は少なくないといえます。

日本私立学校振興・共済事業団が発行する「平成28(2016)年度 私立大学・短期大学等入学志願動向」によれば私立大学の定員割れ率は44.5%、私立短大の定員割れ率は66.9%となっています。首都圏の私立大学・私立短大にも淘汰の時は到来しています。

4年制の大学より短大の方が就職や学習環境に有利な場合があります。特に医療、理美容、栄養、幼児教育、保育などの公的資格を取得するのに短大や専門学校の方が学費、年限などの点でメリットのある場合があります。自らの適性を考え、自ら調べて進路選択しましょう！